

(寄稿)

## 理想的な電子カルテを求めて ～長期保存と分析の狭間で～

電子カルテとは、紙のカルテを電子的なシステムに置き換え、電子情報として編集・管理し、データベースに記録する仕組みのことだが、電子カルテそのものについては、公的な規格や業界標準がなく、メーカーごとに、さらには病院ごとにそれぞれ機能や規模が異なるシステムを電子カルテと呼んでいる。

日本では、2001年12月、e-Japan構想の一環として厚生労働省が策定した「保健医療分野の情報化にむけてのグランドデザイン」において、「2006年度までに全国の400床以上の病院および全診療所の6割以上に電子カルテシステムの普及を図ること」が目標として掲げられた。しかし、電子カルテシステムの2005年10月1日時点における普及率は、病院全体で5.2%、400床以上の病院で16%となっており、政府の目標との開きは大きかった。

このような結果を受け、政府は2006年の「IT新改革戦略」で新たな普及目標を設定し、2008年度までに400床以上の病院のほとんどに、2010年度までには200床以上400床未満の病院のほとんどに、電子カルテシステムを含んだ医療情報システムを普及させる、という目標を掲げている。

今回、ご寄稿いただいた宮島孝直 副院長が勤務される津山中央病院は、1999年の新築移転を機に全面電子カルテ化に踏み切り、11年が経過している。

「電子カルテとは何なのか？」から始まり、立場により異ならざるを得ない評価、そこから導かれる選定ポイントや今後の開発方針など、豊富な経験及び具体例とともに、電子カルテにおける現状分析と将来展望をお話いただいた。

(野村ヘルスケア・サポート&アドバイザー(株) 河添 麻美)

2010年7月29日

Healthcare note

(No. 10-15)

寄稿者名  
川崎医科大学特認教授  
津山中央病院副院長  
宮島 孝直

野村ヘルスケア・  
サポート&アドバイザー  
株式会社

編集主幹  
市川 剛志